

3. 家庭学習は向上したか

最後に、すでに小学生の学習行動と学習意識が向上していることを論じたが、その中で簡単に触れるにとどまった家庭学習について焦点をあて、家庭学習の量と質が向上したことを指摘したい。

① 家庭での学習時間は増加傾向にある

第1回から第3回まで減り続けてきた家庭での学習時間が今回増加に転じた。第3回と第4回を比べると、家で「30分未満」しか勉強しない小学生の割合が第3回の約4割から第4回の3割強へ1割ほど減少した。平均でも、家庭学習時間は第3回の71.5分から第4回の81.5分へ10.0分の増加となっている。

② 宿題が小学生の家庭学習を向上させている

小学生は毎日宿題を着実にやっているようだ。宿題をしている時間をみると、「ほとんどしない」はわずか4.1%、20人に1人以下の割合である。「15分」も23.3%、これらの合計は27.4%。4分の1をようやく超えるにすぎない。「30分」がもっとも多く35.9%、それ以上では「45分」が15.6%、「1時間」が13.9%などとなっている。また「45分以上」宿題をしている小学生は35.4%とおよそ3分の1に達している。

③ 家庭学習の質が向上した

家庭学習では、基本的な学習習慣が身につくとともに、自主性や計画性、そして意欲・態度の面で向上がみられた。

以下、詳細なデータの提示は第2章で行うこととして、大まかな傾向を紹介する。

まず、家庭での学習状況をみると、第1回と比べて「出された宿題をきちんとやっていく」「嫌いな科目の勉強も一生懸命する」などの基本的な学習習慣が向上している。

このほか、「家族に言われなくても自分から進んで勉強する」「計画を立てて勉強する」などの自主性や計画性も向上している。このことは「ほとんど毎日、親は私に『勉強しなさい』と言う」の減少にもつながっている。

さらに「授業で習ったことを、自分でもっと詳しく調べる」と答える小学生が増えている。またわずかであるが、「自分で興味を持ったことを、学校の勉強に関係なく調べる」が増加傾向にある。興味関心からの自主的な家庭学習の姿勢も向上しており、「確かな学力」が家庭学習においても身につけてきているとみることができる。

以上、学習基本調査小学生版は、小学生の学習行動と学習意識が大きく向上したことを明らかにしている。まず、学習行動と意識の面で「確かな学力」が目標としたような状況が出現しつつある。『学びのすすめ』の効果があった可能性を強く示唆している結果といえよう。

また、理数系離れに歯止めがかかった可能性も強く示唆されている。「算数」が好きな割合と「理科」「算数」の理解度が向上している。

最後に、家庭学習も量と質の両面ともに向上した。

全体を通して、小学生の学習については、近年の社会をあげての学習向上の取り組みが功を奏してきたといえるのではないだろうか。

第2章

小学生の学習に関する 意識・実態

邵 勤風 (1節1項)
鈴木 尚子 (1節2項)
宮本 幸子 (1節2項)
樋田大二郎 (1節3項、2節2・3・6項)
木村 治生 (1節4項)
十河 直幸 (2節1項)
諸田 裕子 (2節4・5項)



小学生の学習行動

1. 学校での学習の様子

① 好きな教科

「算数」が「好き」という回答比率が大幅に増加している。「総合的な学習の時間」も第3回より増加している。小学生が「好き」な教科のベスト・スリーは依然として、すべて実技教科で、「体育」「家庭」「図画工作」の順である。また、性別でみると、男子が「算数」「理科」「体育」が好きなのに対して、女子は「国語」「音楽」「家庭」が好きである。

Q | あなたは、次の教科や学習の時間の勉強がどのくらい好きですか。

小学生に教科や学習の時間の勉強がどのくらい好きなのかについてたずねた。図2-1-1は第1回から第4回までの変化をグラフ化したものである。この図から次の3つのことがわかる。

1つめは「算数」が「好き」（「とても好き」＋「まあ好き」の％、以下同）の回答比率が大幅に増加していることだ。「国語」「社会」「算数」「理科」について、「好き」の回答比率をみると、「算数」は第1回から一貫して増加傾向にあり、第4回は第3回の55.6%よりさらに7.2ポイント増加し、62.8%となっている。2002年の新教育課程の実施により、「算数」の内容がやさしくなった（3割削減）こと、それに加えて、授業そのものが変化したということも影響しているのではないだろうか。また、第4回では「算数」の理解度が向上しているという結果（p.23）も出ているので、それも「算数」好きの回答比率の増加につながったのではないかと推測できる。「算数」以外の「国語」「社会」「理科」については、あまり変化がみられなかった。

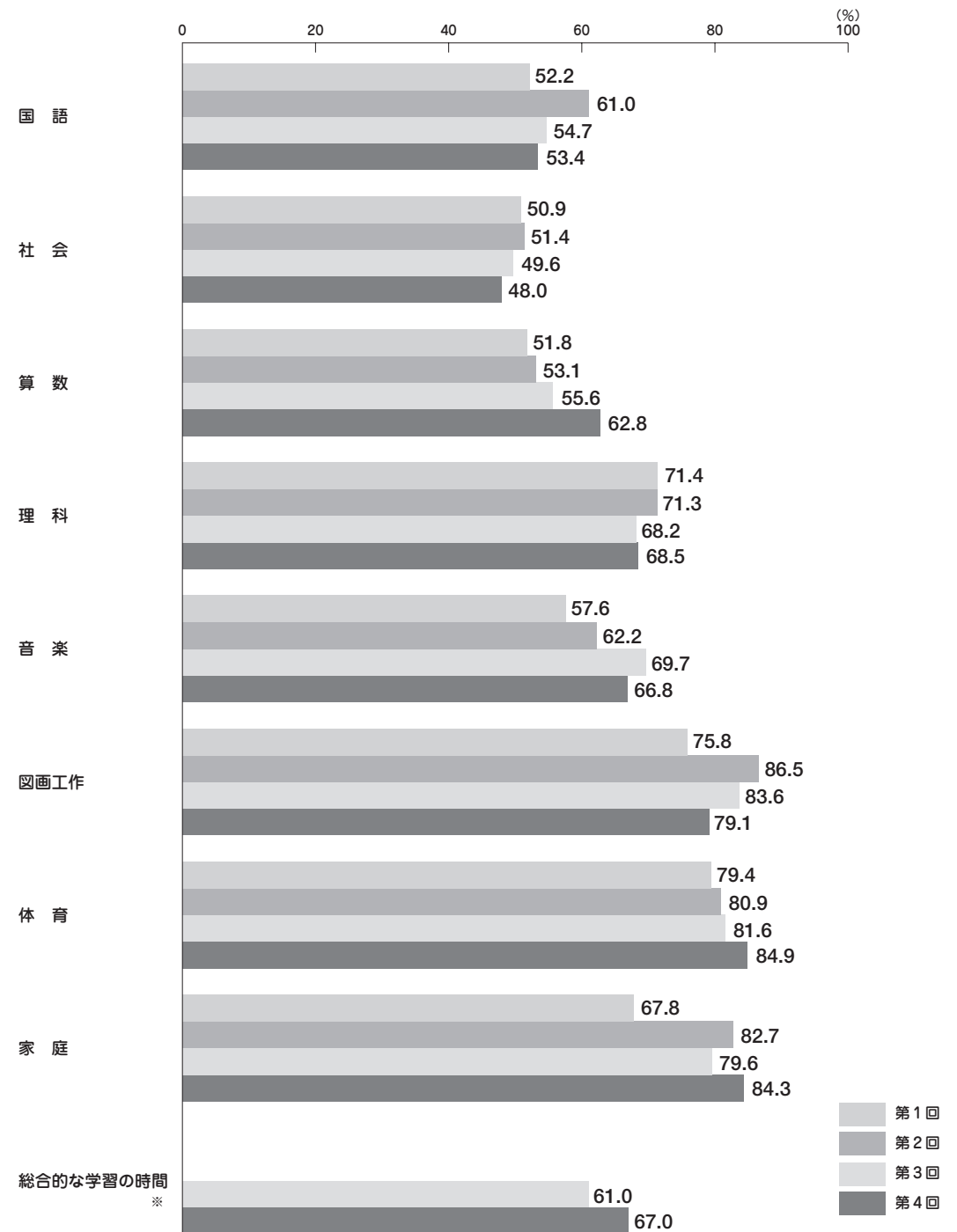
2つめは実技教科が総じて「好き」の回答比率が高いことだ。とくに第3回と比べて、「体育」が81.6%から84.9%に、「家庭」が79.6%から84.3%にと、さらに増加傾向にあることがわかった。

好きな教科のベスト・スリーが実技教科で占められているのは第3回と同じだが、順位は若干入れかわっている。第3回では、第1位が「図画工作」（83.6%）、第2位が「体育」（81.6%）、第3位が「家庭」（79.6%）だった。それに対して今回は、「体育」（84.9%）が第1位となり、「家庭」（84.3%）が第2位に、「図画工作」（79.1%）が第3位となっている。

3つめは「総合的な学習の時間」が第3回の61.0%から第4回の67.0%と、6.0ポイント増加していることだ。小学校では、「総合的な学習の時間」が定着している様子が見えてくる。

次に、性別で好きな教科の比率をみてみよう（表2-1-1）。男子の「好き」の回答比率が高く、女子との差が10ポイント以上開いている教科は「算数」（男子70.1%＞女子54.9

図2-1-1 好きな教科（時系列）



注1) 数値は「とても好き」と「まあ好き」の合計。
 注2) ※は第1回・第2回に該当項目なし。第3回は「やっていない」を除いて集計している。
 注3) サンプル数は第1回2,578名、第2回2,665名、第3回2,402名、第4回2,726名。

%、15.2ポイント差、以下同)、「理科」(73.9%>62.7%、11.2ポイント差)、「体育」(90.3%>79.2%、11.1ポイント差)があげられる。逆に女子の「好き」の回答比率が高く、男子との差が10ポイント以上ある教科は、「音楽」(女子80.1%>男子54.5%、25.6ポイント差、以下同)、「国語」(61.8%>45.7%、16.1ポイ

ント差)、「家庭」(91.1%>78.0%、13.1ポイント差)である。このほか「総合的な学習の時間」は女子が70.3%で男子の64.0%と6.3ポイントの差がある。

このような結果から、男子は理数系科目やスポーツ系科目が好きなのに対して、女子は文系科目や芸術系科目が好きなようである。

表2-1-1 好きな教科(性別)

	(%)	
	男子 (1,397)	女子 (1,310)
国語	45.7	61.8
社会	50.2	46.0
算数	70.1	54.9
理科	73.9	62.7
音楽	54.5	80.1
図画工作	77.6	80.5
体育	90.3	79.2
家庭	78.0	91.1
総合的な学習の時間	64.0	70.3

注1) 数値は「とても好き」と「まあ好き」の合計。
 注2) <>は10ポイント以上、<>は5ポイント以上差があるもの。
 注3) ()内はサンプル数。

② 授業の理解度

「国語」「社会」「算数」「理科」の4教科に関する授業理解度の自己評価については、全般的に「わかっている」の回答比率が増加し、学校の授業がわかるようになってきているといえる。第1回から第4回の16年間の変化をみると、「算数」の増加幅がもっとも大きい。

Q | 学校の授業をどのくらい理解していますか(わかっていますか)。

「国語」「社会」「算数」「理科」の4教科に関する授業理解度の自己評価をたずねてみた。図2-1-2はその結果である。

第1回から第4回の変化をみると、すべての教科は、「わかっている」(「ほとんどわかっている」+「だいたいわかっている」の%、以下同)の回答比率が増加し、授業の理解度が向上している結果となった。「算数」は、第1回より11.5ポイント(第1回62.4%→第4回73.9%、以下同)と、もっとも増加幅が大きい。それに次いで「社会」は9.8ポイント(54.5%→64.3%)、「国語」は7.9ポイント(62.9%→70.8%)、「理科」は6.5ポイント(70.5%→77.0%)の増加となる。

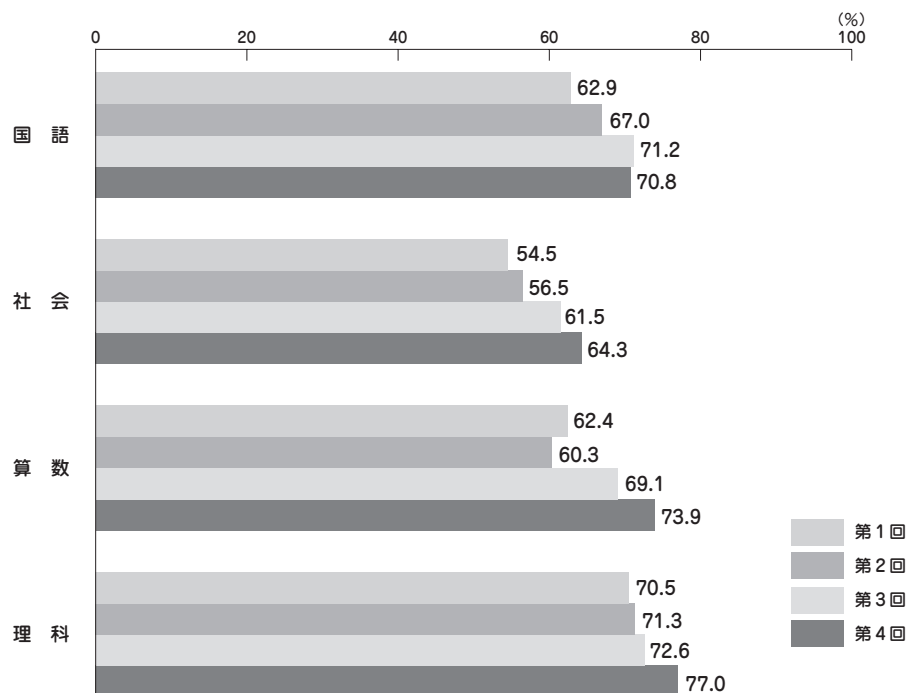
次に、それぞれの教科について、授業の理解度と教科の好き嫌いとの関連をみてみた(表2-1-2)。

「算数」が「わかっている」小学生のうち、77.0%が「算数」を「好き」(「とても好き」+「まあ好き」の%、以下同)と回答している。一方、「わからない」(「半分くらいわかっている」+「あまりわかっていない」+「ほと

んどわかっていない」の%、以下同)小学生のうち、「算数」が「好き」という回答比率は22.1%しかない。「社会」も「わかっている」小学生のうち、64.6%が「好き」と回答したのに対して、「わからない」小学生のうち、「好き」と回答した比率が18.1%にとどまっている。同様に「理科」については、「わかっている」小学生のうち78.7%、「わからない」小学生のうち34.9%が「好き」と回答しており、「国語」は「わかっている」小学生のうち65.9%に対し、「わからない」小学生のうち23.2%となっている。「わかっている」と「わからない」による教科の好きな比率の差では、「算数」がもっとも大きく、54.9ポイントである。それ以外の3教科でも40ポイント以上の差がある。

当たり前のことではあるが、授業がわかるようになると、教科が好きになってくると思われる。もちろん学習を語る際に、教科の好き嫌いはすべてではないが、わかる授業がやはりとても大切である。

図2-1-2 授業の理解度(時系列)



注1) 数値は「ほとんどわかっている」と「だいたいわかっている」の合計。
 注2) サンプル数は第1回2,578名、第2回2,665名、第3回2,402名、第4回2,726名。

表2-1-2 教科が好きな比率(授業の理解度別)

科目	理解度	サンプル数(名)	教科が好きな比率(%)
国語	わかっている	1,273	65.9
	わからない	182	23.2
社会	わかっている	1,132	64.6
	わからない	174	18.1
算数	わかっている	1,550	77.0
	わからない	152	22.1
理科	わかっている	1,652	78.7
	わからない	214	34.9

注1) 各教科とも「わかっている」は、「ほとんどわかっている」「だいたいわかっている」と回答した人。「わからない」は、「半分くらいわかっている」「あまりわかっている」「ほとんどわかっていない」と回答した人。
 注2) 「教科が好きな比率」は、「とても好き」と「まあ好き」の合計。

③ 授業の受け方

「黒板に書かれていなくても、先生の話で大切なことはノートに書く」「授業でわからないことは、あとで先生に質問する」などの回答比率が増加している。一方、「マンガをかいたり、文房具で遊ぶ」「近くの人とおしゃべりをする」などが減少している。授業中、逸脱行為が少なくなり、全体的に授業をまじめに受けている様子である。

Q | あなたの授業中の様子についてお聞きします。

子どもたちの授業中の様子はどのようなもののだろうか。表2-1-3は授業の受け方の時系列での変化をみたものである。

第1回と比べて、回答比率(「よくある」+「時々ある」の%、以下同)が増加しているのは「黒板に書かれていなくても、先生の話で大切なことはノートに書く」(第1回37.4%→第4回49.2%、以下同)、「黒板に書かれたことを、きちんとノートに書く」(82.8%→89.2%)、「授業でわからないことは、あとで先生に質問する」(26.0%→32.3%)などである。学習態度がまじめになってきたといえよう。

逆に第1回と比べて回答比率が減少しているのは「マンガをかいたり、文房具で遊ぶ」(33.9%→25.0%)、「近くの人とおしゃべりをする」(66.3%→59.2%)である。「ぼうっと他のことを考えている」も第3回より回答比率が下がっている(第3回40.2%→第4回35.2%)。授業中、逸脱行為が少なくなったという結果である。

他に、「授業の内容が難しいと思う」も第3回より下がっている(第3回52.6%→第4回45.9%)。授業の理解度が向上したことや、2002年新教育課程の実施により、内容がやさしくなったことなどとの関係が考えられる。

次に、性別によって、授業の受け方に差があるかをみていく(表2-1-4)。

女子のほうの回答比率が高いのは「黒板に書かれていなくても、先生の話で大切なこと

はノートに書く」(女子58.9%>男子40.2%、以下同)、「黒板に書かれたことを、きちんとノートに書く」(94.8%>84.2%)である。この2項目では、差が10ポイント以上開いている。また、「テストで間違えるとくやしいと思う」では、女子が83.8%>男子が77.3%で、両者の間では6.5ポイントの差がある。女子のほうがまじめに授業を受けている様子がかがえる。

一方、男子のほうの回答比率が高く、女子と10ポイント以上差があるのは「授業の内容が簡単すぎると思う」(男子46.5%>女子32.2%、以下同)、「近くの人とおしゃべりをする」(65.3%>52.7%)、「マンガをかいたり、文房具で遊ぶ」(31.1%>18.5%)、「授業時間になっても教室に入らない」(14.4%>4.4%)である。また、「ぼうっと他のことを考えている」と「先生に注意されても友達とおしゃべりを続ける」も女子より男子のほうの回答比率が5ポイント以上高い。逸脱行為は女子より男子のほうが多い傾向がみられた。

つづいて、表2-1-5は成績の自己評価別にみた授業の受け方の結果である。

上位層のほうが下位層より回答比率が高いのは「授業の内容が簡単すぎると思う」「黒板に書かれていなくても、先生の話で大切なことはノートに書く」「テストで間違えるとくやしいと思う」「黒板に書かれたことを、きちんとノートに書く」などである。上位層

は授業態度がまじめであると考えられる。
一方、下位層が上位層より回答比率が高いのは「授業の内容が難しいと思う」「ぼうっと他のことを考えている」「近くの人とおし

ゃべりをする」などである。下位層が授業の内容を難しく感じ、授業に集中していない傾向がうかがえる。

表 2-1-3 授業の受け方（時系列）

	(%)			
	第1回 (2,578)	第2回 (2,665)	第3回 (2,402)	第4回 (2,726)
黒板に書かれたことを、きちんとノートに書く	82.8	87.8	88.8	89.2
テストで間違えるとくやしいと思う	—	—	77.5	80.4
近くの人とおしゃべりをする	66.3	66.4	65.0	59.2
黒板に書かれていなくても、先生の話で大切なことはノートに書く	37.4	45.8	46.9	49.2
授業の内容が難しいと思う	41.5	55.4	52.6	45.9
授業の内容が簡単すぎると思う	27.5	35.2	42.1	39.5
ぼうっと他のことを考えている	38.0	39.3	40.2	35.2
授業でわからないことは、あとで先生に質問する	26.0	31.8	30.7	32.3
マンガをかいたり、文房具で遊ぶ	33.9	36.7	26.3	25.0
先生に注意されても友だちとおしゃべりを続ける	—	—	12.0	11.0
授業時間になっても教室に入らない	—	—	10.6	9.6
授業中にいねむりをする	3.5	5.2	4.1	6.0
授業中に、他の科目や塾の勉強をする	3.2	8.3	5.3	4.6

注1) 数値は「よくある」と「時々ある」の合計。
注2) —は該当項目なし。
注3) ()内はサンプル数。

表 2-1-4 授業の受け方（性別）

	(%)		
	男子 (1,397)		女子 (1,310)
黒板に書かれたことを、きちんとノートに書く	84.2	≪	94.8
テストで間違えるとくやしいと思う	77.3	<	83.8
近くの人とおしゃべりをする	65.3	≫	52.7
授業の内容が簡単すぎると思う	46.5	≫	32.2
授業の内容が難しいと思う	44.9		46.8
黒板に書かれていなくても、先生の話で大切なことはノートに書く	40.2	≪	58.9
ぼうっと他のことを考えている	39.0	>	31.0
授業でわからないことは、あとで先生に質問する	32.5		32.3
マンガをかいたり、文房具で遊ぶ	31.1	≫	18.5
先生に注意されても友だちとおしゃべりを続ける	14.5	>	7.4
授業時間になっても教室に入らない	14.4	≫	4.4
授業中にいねむりをする	7.3		4.8
授業中に、他の科目や塾の勉強をする	6.5		2.4

注1) 数値は「よくある」と「時々ある」の合計。
注2) ≪≫は10ポイント以上、<>は5ポイント以上差があるもの。
注3) ()内はサンプル数。

表 2-1-5 授業の受け方（成績の自己評価別）

	(%)			
	上位層 (924)	中位層 (799)	下位層 (923)	上位層と下位層 の差
黒板に書かれたことを、きちんとノートに書く	92.9	91.3	84.4	>
テストで間違えるとくやしいと思う	83.6	82.5	75.0	>
授業の内容が簡単すぎると思う	60.1	35.3	23.0	≫
黒板に書かれていなくても、先生の話で大切なことはノートに書く	57.5	51.1	39.6	≫
近くの人とおしゃべりをする	54.7	57.5	65.5	≪
授業でわからないことは、あとで先生に質問する	33.8	33.4	29.9	
ぼうっと他のことを考えている	28.6	31.4	44.1	≪
授業の内容が難しいと思う	27.5	46.9	63.2	≪
マンガをかいたり、文房具で遊ぶ	20.6	23.8	30.0	<
先生に注意されても友だちとおしゃべりを続ける	8.8	9.6	14.3	<
授業時間になっても教室に入らない	8.4	9.4	11.4	
授業中にいねむりをする	3.5	5.9	8.8	<
授業中に、他の科目や塾の勉強をする	3.0	4.9	6.0	

注1) 数値は「よくある」と「時々ある」の合計。
注2) ≪≫は10ポイント以上、<>は5ポイント以上差があるもの。
注3) ()内はサンプル数。

④ 好きな学校の勉強方法

「好き」の回答比率をみると、すべての項目で5割を超えている。もっとも回答比率が高いのは「パソコンを使ってする勉強」で、もっとも低いのは「考えたり調べたりしたことをいろいろ工夫して発表すること」である。成績の自己評価別でみると、すべての項目で、上位層のほうが下位層より「好き」の回答比率が高い。

Q | あなたは、次にあげる学校の勉強方法は、どのくらい好きですか。

図2-1-3は第4回の全体数値と性別にみた好きな学校の勉強方法の結果である。

まず、第4回の全体数値をみってみる。すべての項目で「好き」(「とても好き」+「好き」の%、以下同)の回答が5割を超えている。もっとも回答比率が高いのは「パソコンを使ってする勉強」で91.1%、もっとも低いのは「考えたり調べたりしたことをいろいろ工夫して発表すること」52.9%である。この質問項目は第3回から追加したものなので、第3回からの5年間の変化もみてもみよう。ここでは、図表は省略するが、「個人(自分一人)で何かを考えたり調べたりする授業」で、「好き」という回答比率が増加している(第3回51.3%→第4回57.2%)。それ以外はほとんど変化がみられなかった。

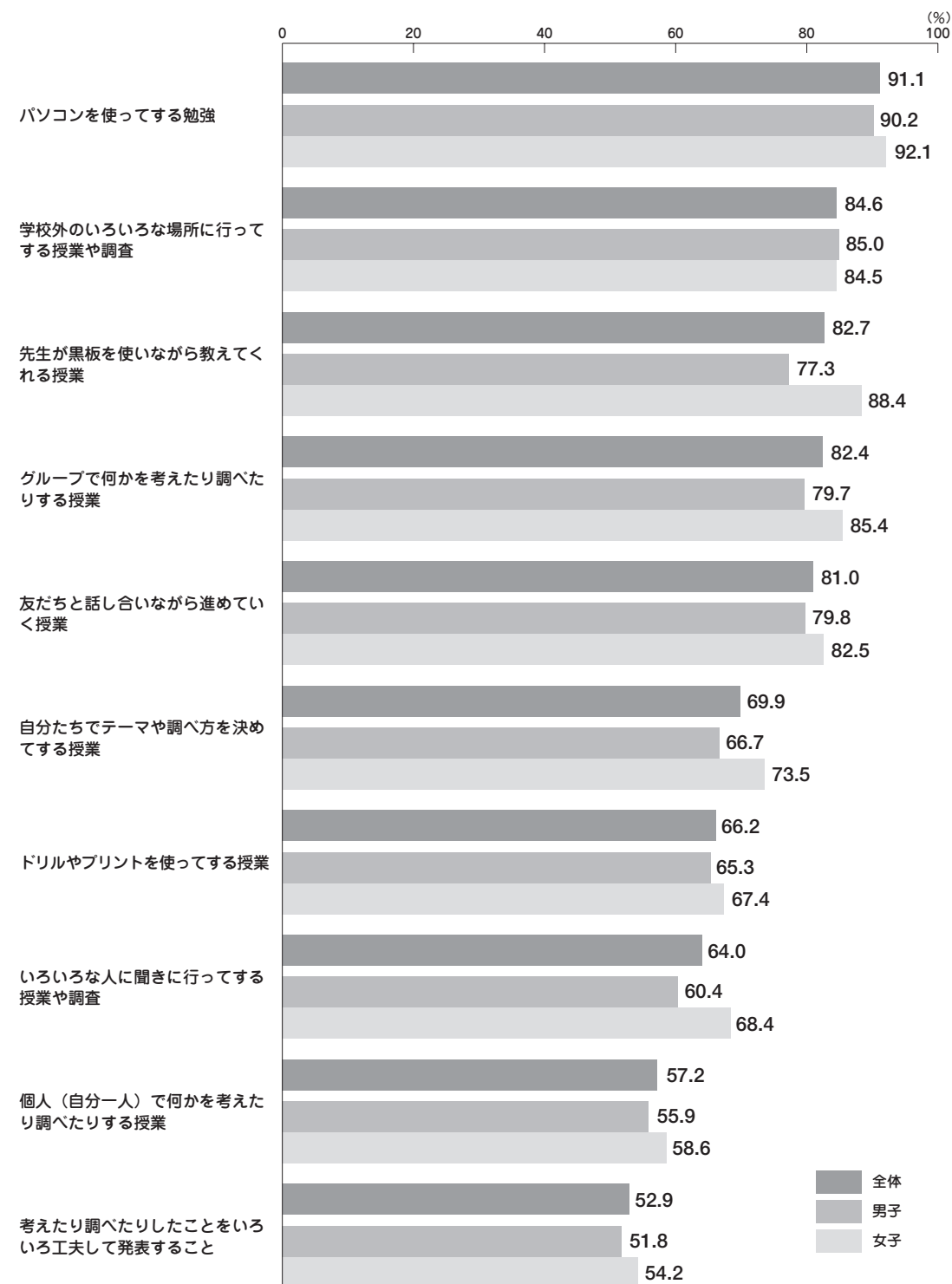
次に、性別に好きな学校の勉強方法をみてる(図2-1-3)。「学校外のいろいろな場所に行っている授業や調査」以外の項目では、男子より女子のほうが「好き」との回答比率が高い傾向がみられた。たとえば、伝統的な勉強方法である「先生が黒板を使いながら教えてくれる授業」(女子88.4%>男子77.3%、以下同)や子ども自身の主体性を求める「新しい学力観」に基づく勉強方法「自分たちでテーマや調べ方を決めてする授業」(73.5%>

66.7%)、「いろいろな人に聞きに行っている授業や調査」(68.4%>60.4%)などである。自分たちが主体となって、人とコミュニケーションを図りながら、学んでいくといった勉強方法は女子のほうが好む傾向が強いと考えられる。

ここで、さらに成績の自己評価別に好きな学校の勉強方法をみてもいい。

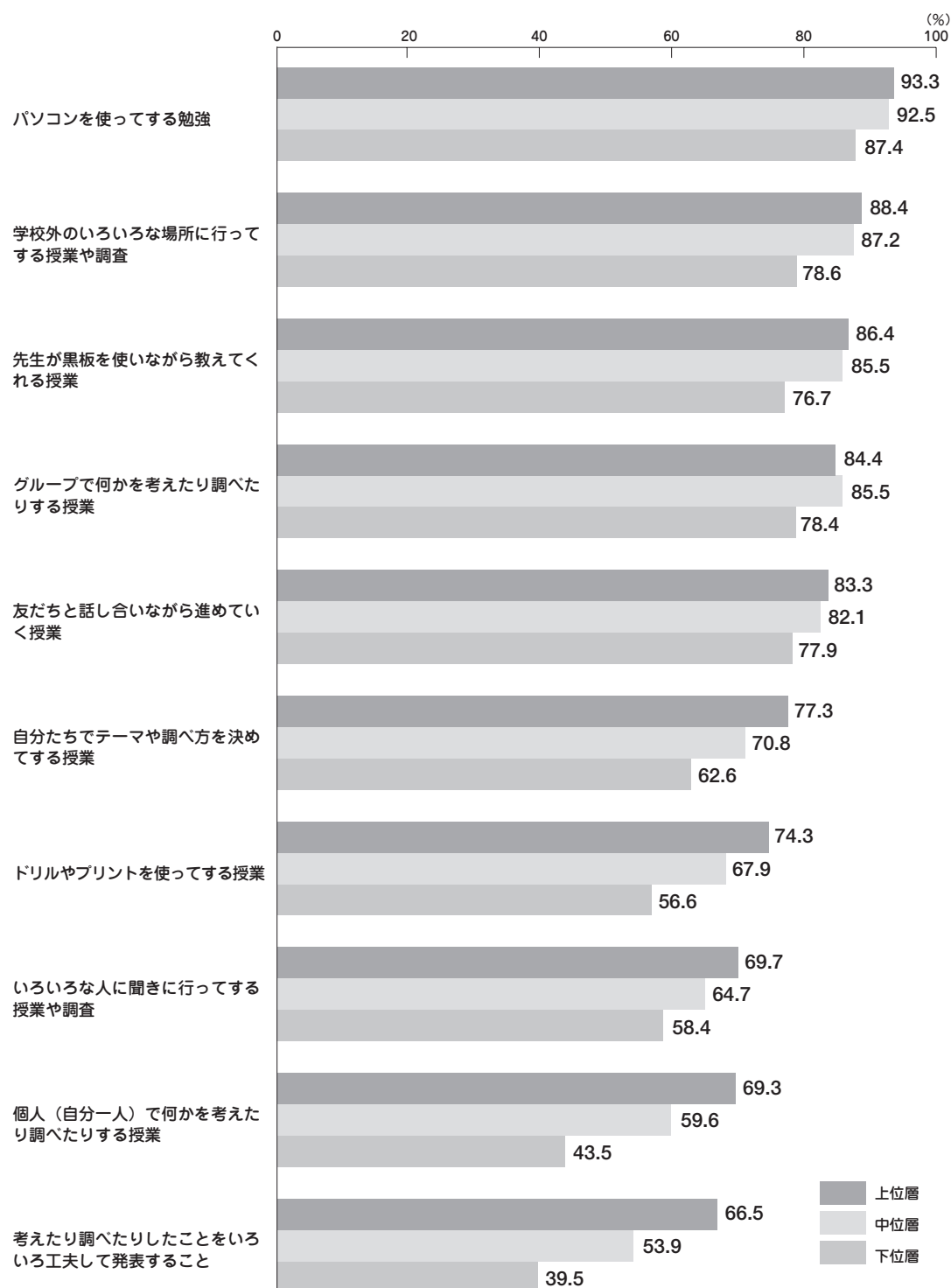
図2-1-4に示すように、すべての項目にわたって、成績の自己評価の上位層のほうが下位層より「好き」の回答比率が高い。とくに、「考えたり調べたりしたことをいろいろ工夫して発表すること」では、上位層66.5%>中位層53.9%>下位層39.5%で、上位層と下位層との間には27.0ポイントの差が開いている。「個人(自分一人)で何かを考えたり調べたりする授業」では、上位層69.3%>中位層59.6%>下位層43.5%で、上位層と下位層との間には25.8ポイントの差がある。また、伝統的な勉強方法である「先生が黒板を使いながら教えてくれる授業」でも、上位層86.4%>下位層76.7%で、両者との間に9.7ポイントの差がある。思考力や表現力を育てることを目的にしている比較的新しい勉強方法も、伝統的な勉強方法も、成績の自己評価が下位層であるほど苦手であると考えられる。

図2-1-3 好きな学校の勉強方法(全体・性別)



注1) 数値は「とても好き」と「好き」の合計。
注2) サンプル数は全体2,726名、男子1,397名、女子1,310名。

図2-1-4 好きな学校の勉強方法(成績の自己評価別)



注1) 数値は「とても好き」と「好き」の合計。
 注2) サンプル数は上位層924名、中位層799名、下位層923名。

2. 家での学習の様子

① 学校外での学習時間

小学生の学習時間には個人差があるが、平均すると81.5分である。「ほとんどしない」と「およそ30分」を合計した比率は第1回28.5%→第2回32.3%→第3回40.3%であったが、第4回は33.1%と減少しており、小学生が学習に回帰している様子がみられた。大都市の中学受験予定者の増加、中学受験予定者がさらに勉強に向かったことが主な要因と考えられる。

- Q** 家での勉強時間などについてお聞きします。
- あなたはふだん(月曜日～金曜日)、家に帰ってから1日にだいたい何時間くらい勉強していますか。学習塾や家庭教師について勉強する時間も含めてください。
 - そのうち、学校の宿題や課題をする時間は何時間くらいですか。
 - 休日には、家で何時間くらい勉強しますか。学習塾や家庭教師について勉強する時間も含めてください。
 - ふだん(月曜日～金曜日)テレビを1日に何時間くらい見ますか。

小学生は学校が終わった後に、どのくらい勉強しているのだろうか。図2-1-5に、平日の学習時間の変化を示した。今回の結果をみると、「およそ30分」「1時間」という回答がそれぞれ2割程度を占め、平均すると81.5分である。

時系列による変化をみてみよう。第3回の調査までは、「30分以下」(「ほとんどしない」+「およそ30分」の%、以下同)が第1回28.5%→第2回32.3%→第3回40.3%と調査を重ねるごとに増え、学校外ではあまり勉強しない小学生が増加の傾向にあった。第3回調査の時期は、ちょうど教育における「ゆとり」確保を目指し授業時間数や学習内容が削減された時期(1998年)と重なる。

今回の調査では、「30分以下」の比率は33.1%であり、小学生の学習時間は回復傾向にあるようだ。平日の平均学習時間の変化からみても、この回復の傾向は明らかだ(第1回87.2

分→第2回77.9分→第3回71.5分→第4回81.5分)。

さらに、休日の学習時間をみてみよう(図2-1-6)。休日の学習時間はもともと平日よりも少ないものの、こちらも第3回まで減少していたが増加に転じている。平均時間をみると、第2回57.2分→第3回48.2分→第4回67.3分となっており、第3回と比べ19.1分も増加している(第2回は土曜日と日曜日の学習時間を分けてたずねているため、土日の平均を算出した)。さらに休日は、「1時間30分以上」*学習するという回答が第3回からの5年で急に増えているのが特徴的だ(第3回19.4%→第4回30.9%)。

では、このように小学生の学習時間が伸びた要因は何だろうか。全体的に机の前に戻ってきているのだろうか。それとも、一部の小学生のみが猛烈に学習に向かっているのだろうか。

*「1時間30分以上」は「1時間30分」「2時間」「2時間30分」「3時間」「3時間30分」「それ以上」の合計。

地域差に着目して分析してみると(図2-1-7)、次のようなことがみえてくる。確かに大都市の平均学習時間は顕著に伸びているものの(第3回81.8分→第4回101.1分)、地方都市、郡部ではほぼ横ばいである。つまり、今回の調査結果で学習時間が増加したというのは、すべての地域における全体的な増加ではなく、主に大都市の傾向に引っ張られた結果、全体で見たときにも急に増加したようにみえたのだ。

そこで大都市に注目しながら、さらにデータを詳しくみていくことにする。第3回から第4回の間で大きく変化したことは何だろうか。第一に中学受験率があげられる。中学受験率は、地方都市、郡部ではさほど変化がみられないものの、大都市では大幅に増加している。図表では示さないが、中学受験率を地域別にみると、郡部では、第2回11.7%→第3回9.1%→第4回11.3%、地方都市でも第2

回15.8%→第3回19.6%→第4回17.3%と変化が小さい。一方、大都市では第2回28.7%→第3回25.1%→第4回37.7%と、第3回から第4回の間で13ポイント近く増加している。

第二にあげられる変化は、中学受験予定者の学習時間である(表2-1-6)。大都市で中学受験を決めている小学生^{*1}、まだ決めていない小学生^{*2}、受験をしない小学生^{*3}の平均学習時間を比べるとそれぞれ156.9分、74.4分、54.3分となり、中学受験を決めている小学生は、その他の小学生の約2~3倍学習している。

大都市の中学受験予定者の平均学習時間は、他の地域よりも長い(大都市156.9分>地方都市92.7分>郡部75.3分)、第3回からの伸びももっとも大きい(大都市26.1分>地方都市4.0分>郡部-11.6分)。

以上から、今回の調査結果において学習時間が伸びていた理由としては、学習時間が極

端に長い大都市での中学受験率が大きく増加したこと(第3回から第4回の5年間で12.6ポイント増)、また、大都市の中学受験予定者がこれまで以上に学校外で勉強する時間を持つようになってきていること(同5年間で約30分増)が主因と考えられる。

ただ、大都市の小学生であっても、中学受験予定者と未定者は勉強時間が長いものの、中学受験をしないと決めている小学生の勉強時間は、他の地域と比べて非常に短い点(54.3分)も特徴的だ。

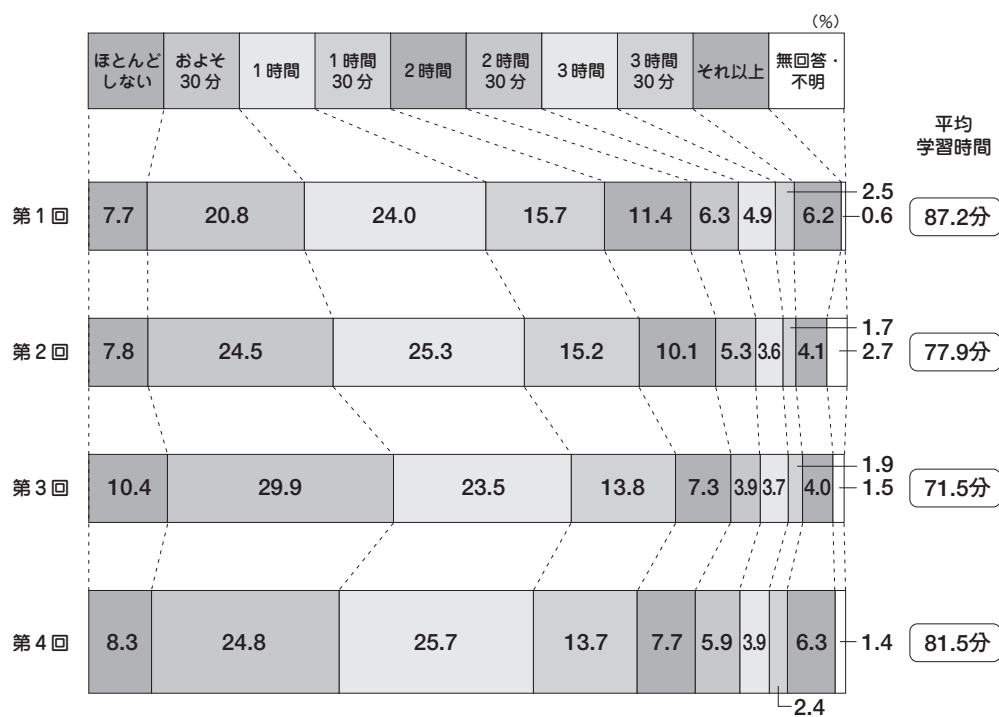
さらに、今回は平日に学校外で勉強する時間のうち、宿題にかけ時間をたずねている。この結果についてみてみよう(図2-1-8)。宿題にかけ時間で一番多いのは「30分」の35.9%で、およそ3人に1人がこのように回答している。その平均をみると36.4分である。平日の学習時間の平均と並べてみると、学習時間に占める宿題の時間は44.7%となる(表

2-1-7)。小学生は平日の学習時間の半分弱を学校の宿題にあて、そのほかの時間を予習、復習、通信教育、塾の勉強などにあてているようだ。

最後に、平日のテレビ視聴時間をみてみよう(図2-1-9)。平日のテレビ視聴時間は、これまで増加傾向にあったが、その増加傾向に歯止めがかかり、第3回と比べるとむしろ短くなっている。これは、これまでみてきたように、学習時間が増加していることと関係があるか、もしくは、小学生の余暇の過ごし方の時間配分がテレビ視聴からインターネットなどに多少変わってきていることが要因として考えられる。

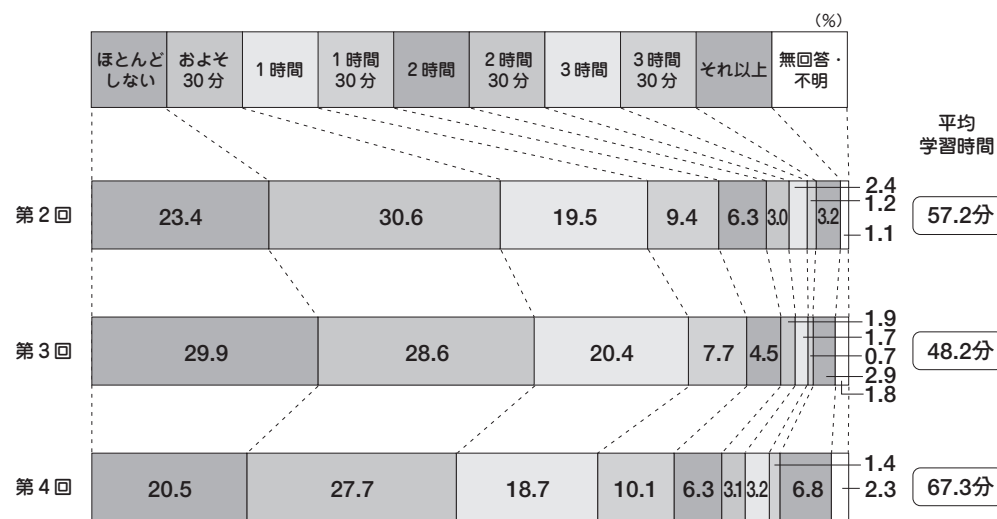
※1 中学受験を決めている小学生は「はい」と答えた小学生。
 ※2 決めていない小学生は「まだ決めていない」と答えた小学生。
 ※3 受験をしない小学生は「いいえ」と答えた小学生。

図2-1-5 平日の学習時間(時系列)



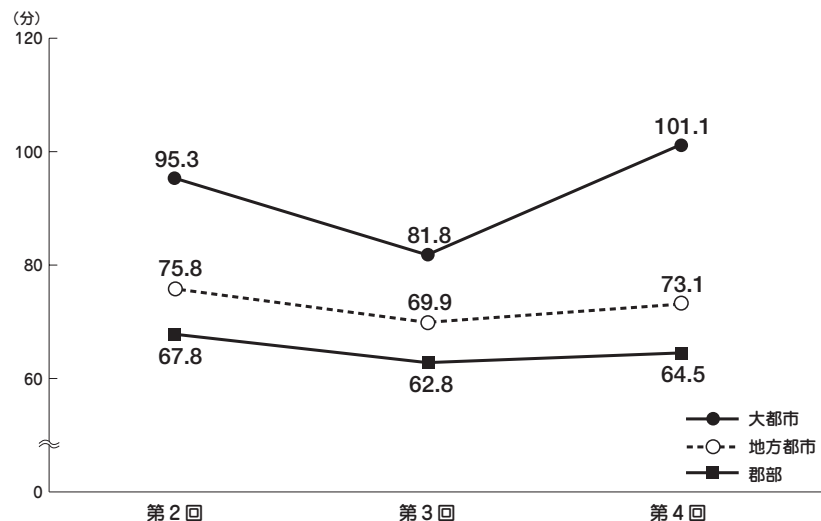
注1) 学習時間の平均は「ほとんどしない」を0分、「3時間30分」を210分、「それ以上」を240分のように置き換えて、「無回答・不明」を除いて算出した。
 注2) サンプル数は第1回2,578名、第2回2,665名、第3回2,402名、第4回2,726名。

図2-1-6 休日の学習時間(時系列)



注1) 学習時間の平均の算出方法は図2-1-5と同様。
 注2) 第2回では土曜日と日曜日の学習時間を分けてたずねているため、土日の平均を算出している。
 注3) サンプル数は第2回2,665名、第3回2,402名、第4回2,726名。

図2-1-7 平日の平均学習時間(地域別の時系列)



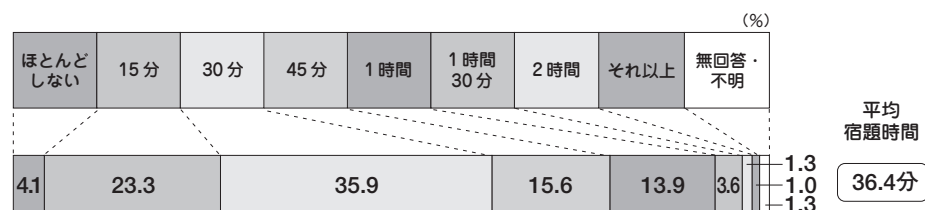
注1) 学習時間の平均の算出方法は図2-1-5と同様。
 注2) サンプル数は第2回大都市749名、地方都市689名、郡部1,156名。第3回大都市827名、地方都市696名、郡部842名。第4回大都市1,092名、地方都市669名、郡部927名。

表2-1-6 平日の平均学習時間(中学受験の予定有無別の地域別・時系列)

	(分)					
	大都市		地方都市		郡部	
	第3回 (827)	第4回 (1,092)	第3回 (696)	第4回 (669)	第3回 (842)	第4回 (927)
はい	130.8	156.9	88.7	92.7	86.9	75.3
まだ決めていない	68.7	74.4	66.2	66.6	59.3	63.2
いいえ	57.6	54.3	62.8	72.4	61.6	64.7
無回答・不明	115.0	71.7	96.0	85.3	65.0	46.3
合計	81.8	101.1	69.9	73.1	62.8	64.5

注1) 学習時間の平均の算出方法は図2-1-5と同様。
 注2) ()内はサンプル数。

図2-1-8 平日に宿題をする時間(全体)



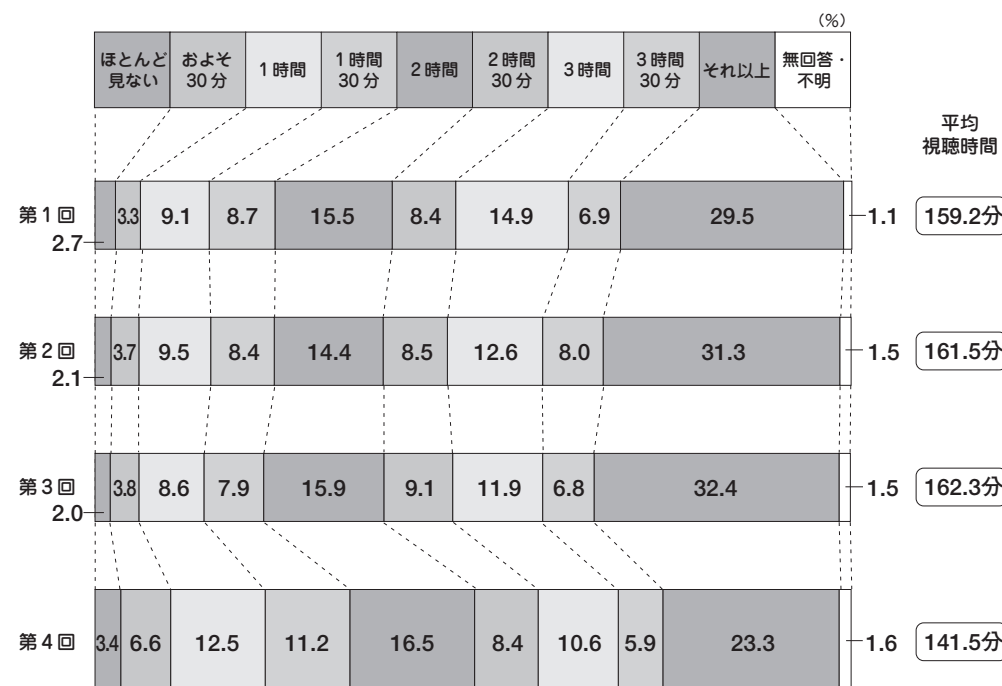
注1) 平日の宿題をする時間の平均は「ほとんど見ない」を0分、「2時間」を120分、「それ以上」を150分のように置き換えて、「無回答・不明」は除いて算出した。
 注2) サンプル数は2,726名。

表2-1-7 平日の学習時間に占める宿題をする時間の比率

宿題をする時間の平均(分)	学習をする時間の平均(分)	学習時間に占める宿題をする時間の比率(%)
36.4	81.5	44.7

注) 学習時間・宿題時間の平均の算出方法は、図2-1-5、8と同様。

図2-1-9 平日のテレビ視聴時間(時系列)



注1) 平均視聴時間は「ほとんど見ない」を0分、「3時間30分」を210分、「それ以上」を240分のように置き換えて、「無回答・不明」は除いて算出した。
 注2) サンプル数は第1回2,578名、第2回2,665名、第3回2,402名、第4回2,726名。

② 家での学習の様子

「あてはまる」と「まああてはまる」の合計比率の大きい項目は、「出された宿題をきちんとやっていく」(94.0%)、「勉強していてわからないことがあると、家の人に聞く」(88.9%)、「嫌いな科目の勉強も一生懸命する」(81.3%)と続く。時系列でみると、第1回から第4回の16年間で、小学生の家庭での学習態度は計画的でまじめな様子になっていることがうかがえる。

Q | あなたは家で勉強するとき、次のようなことをしますか。

小学生は、家庭でどのような内容の学習をどのように進めているのだろうか。

まず勉強方法をみると(表2-1-8)、たずねている4項目の中で「あてはまる」の比率は、「書店などで売っている問題集・参考書を使って勉強する」が35.2%と、もっとも多くなっている。以下、「通信教育を受けている」が20.9%、「宅配の学習教材をとっている」が10.7%、「家庭教師についている」が3.6%と続いている。

つづいて、家での学習の様子をたずねる項目をみてみよう。表2-1-8では、これらの項目に対して「あてはまる」と「まああてはまる」の合計比率(以下同)を示している。とくに多かったのは、「出された宿題をきちんとやっていく」(94.0%)、「勉強していてわからないことがあると、家の人に聞く」(88.9%)、「嫌いな科目の勉強も一生懸命する」(81.3%)、「家族に言われなくても自分から進んで勉強する」(79.7%)の4項目で、いずれも8~9割程度の小学生が回答している。自身の勉強態度に関して、概して肯定的な回答が多い。

性別でみると(表2-1-8)、女子のほうでよりまじめな学習態度がみられる。とくに、

「授業で習ったことは、その日のうちに復習する」(女子57.7%>男子47.6%)、「『勉強は学校だけですればいい』と思う」(男子35.2%>女子25.5%)では、男女で10ポイント程度の開きがみられる。前項でも「授業の受け方」について女子のほうがまじめで、逸脱行為も少ない傾向が指摘されている(p.25)。家庭での学習も含めて、小学生では女子のほうが学習に積極的に取り組む傾向があるといえる。

また、時系列でみると(図2-1-10)、計画的な勉強態度や、まじめに学習に取り組む様子を示す項目の多くで「あてはまる」と回答した比率が増加している。第1回から第4回の16年間で5ポイント以上増加しているものを具体的にとりあげると、「授業で習ったことを、自分でもっと詳しく調べる」(第1回35.7%→第4回57.4%、以下同)、「家族に言われなくても自分から進んで勉強する」(67.8%→79.7%)、「予習をしてから授業を受ける」(43.8%→54.3%)、「嫌いな科目の勉強も一生懸命する」(71.2%→81.3%)、「授業で習ったことは、その日のうちに復習する」(46.0%→52.3%)、「計画を立てて勉強する」(57.0%→62.5%)である。小学生が計画的に、まじめに家庭学習をする傾向が強くなっている。

表2-1-8 家での学習の様子(全体・性別)

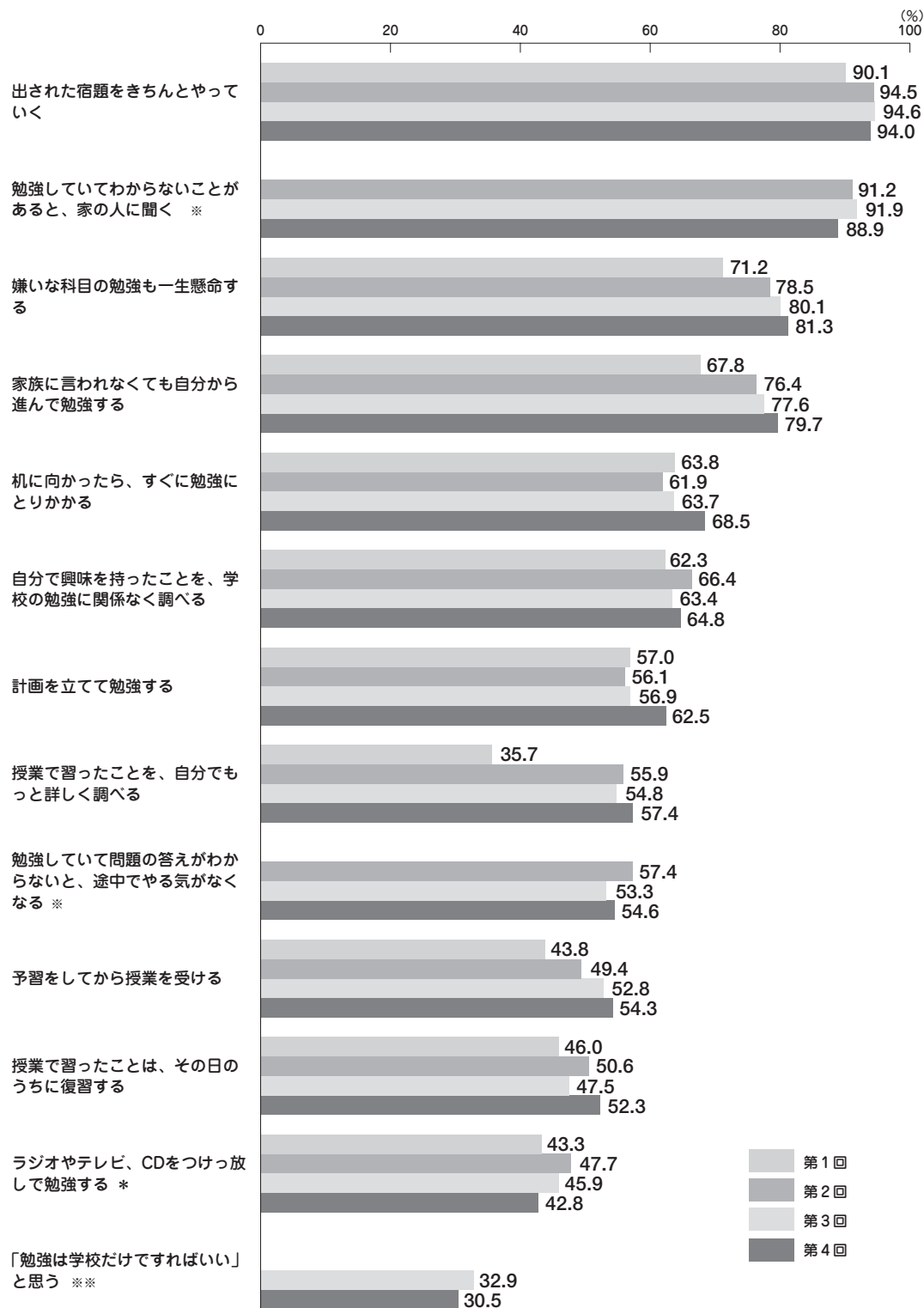
〈学習の様子〉	全体 (2,726)	男子		女子	
		(1,397)		(1,310)	
出された宿題をきちんとやっていく	94.0	91.0	<	97.2	
勉強していてわからないことがあると、家の人に聞く	88.9	86.1	<	91.9	
嫌いな科目の勉強も一生懸命する	81.3	77.3	<	85.7	
家族に言われなくても自分から進んで勉強する	79.7	76.3	<	83.5	
机に向かったら、すぐに勉強にとりかかる	68.5	64.5	<	73.1	
自分で興味を持ったことを、学校の勉強に関係なく調べる	64.8	65.2		64.6	
計画を立てて勉強する	62.5	58.5	<	66.8	
授業で習ったことを、自分でもっと詳しく調べる	57.4	55.5		59.8	
勉強していて問題の答えがわからないと、途中でやる気なくなる	54.6	55.3		54.2	
予習をしてから授業を受ける	54.3	52.6		56.6	
授業で習ったことは、その日のうちに復習する	52.3	47.6	<<	57.7	
ラジオやテレビ、CDをつけっ放して勉強する	42.8	42.1		43.8	
「勉強は学校だけですればいい」と思う	30.5	35.2	>	25.5	
〈勉強方法〉					
書店などで売っている問題集・参考書を使って勉強する	35.2	32.1	<	38.3	
通信教育を受けている	20.9	21.0		20.9	
宅配の学習教材をとっている	10.7	10.2		11.3	
家庭教師についている	3.6	4.3		2.8	

注1) 数値は「あてはまる」と「まああてはまる」の合計、勉強方法の4項目は「あてはまる」の比率。

注2) <>は10ポイント以上、< >は5ポイント以上差があるもの。

注3) ()内はサンプル数。

図2-1-10 家での学習の様子(時系列)



注1) 数値は「あてはまる」と「まああてはまる」の合計。
 注2) *は第1回に該当項目なし、**は第1回・第2回に該当項目なし。
 注3) *は第1回は「ラジオやテレビをつけっ放して勉強する」。
 注4) サンプル数は第1回2,578名、第2回2,665名、第3回2,402名、第4回2,726名。

③ 日常生活の中での「学習」

日常生活の中での「学習」で、もっとも多かったのは「文学・小説・物語・童話などの本を読む」の74.6%、つづいて「読みたい本を本屋さんで探して買う」が71.1%、「家でペットや動物・植物の世話をする」が59.4%であった。

Q | あなたは、ふだん(学校の授業や宿題以外で)次のことをどのくらいしますか。

ここまでは、学校での勉強やそれを補うかたちでの家庭学習について扱ってきた。しかし、読書や美術館・博物館の見学といったさまざまな体験もまた、広義の「学習」としてとらえることができるだろう。ここでは、小学生がそのような日常生活の中での「学習」をどの程度行っているのか、調査結果をみていきたい。

表2-1-9は、それぞれの項目について「よくする」+「時々する」の比率を示したものである。9項目中6項目で5割を超えており、全体的に日常生活の中で豊かな「学習」体験をしている様子が見えてくる。もっとも多かったのは「文学・小説・物語・童話などの本を読む」74.6%であり、「読みたい本を本屋さんで探して買う」71.1%、「家でペットや動物・植物の世話をする」59.4%と続く。

時系列でみると(図2-1-11)、「地域の図書館で本を読んだり借りたりする」(第1回43.5%→第4回53.4%、以下同)、「美術館や博物館に行く」(23.2%→28.3%)の2項目で、第1回から5ポイント以上の増加がみられた。また、第3回から今回にかけて、読書習慣を

たずねる項目で増加が大きいのも特徴的である。具体的には、「歴史の本や伝記の本を読む」(第3回43.7%→第4回51.0%、以下同)、「文学・小説・物語・童話などの本を読む」(68.6%→74.6%)の2項目があげられる。「自然や動物・植物の本を読む」では増加の傾向はみられなかったものの、総じて読書の習慣が定着している小学生が増加していることが推察される。背景として、全国で広まっている「朝の読書運動」の影響も考えられるだろう。

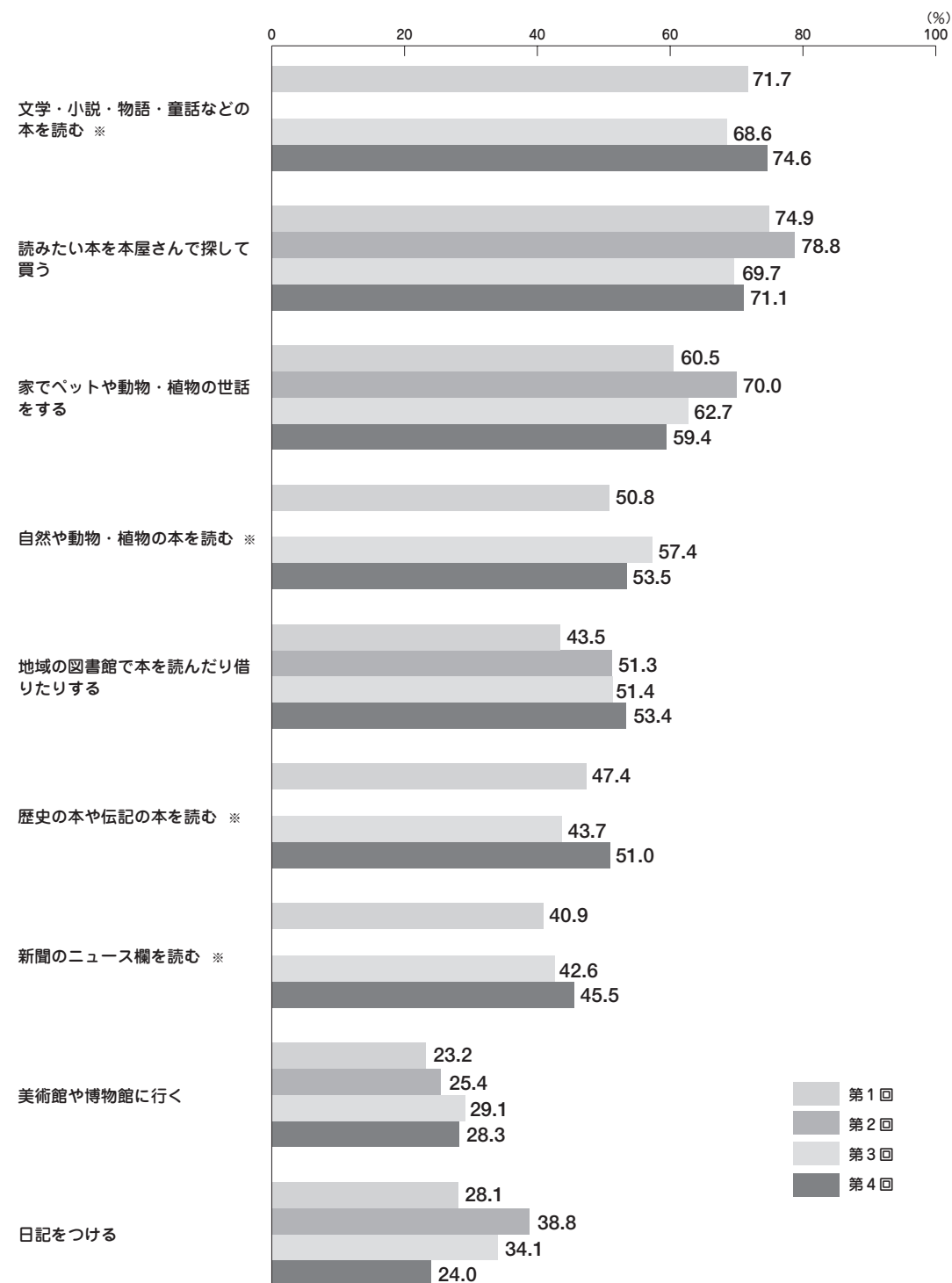
性別でみると(表2-1-9)、全体的に女子でこうした「学習」を高い頻度で行う比率が高い。とくに、「文学・小説・物語・童話などの本を読む」(女子83.2%>男子66.7%、以下同)、「日記をつける」(32.2%>16.2%)、「地域の図書館で本を読んだり借りたりする」(58.3%>49.0%)の3項目においては、大きな差がみられる。反対に、「自然や動物・植物の本を読む」では男子60.1%、女子46.4%と、男子のほうが13.7ポイント高くなっている。

表2-1-9 日常生活の中での「学習」(全体・性別)

	(%)		
	全体 (2,726)	男子 (1,397)	女子 (1,310)
文学・小説・物語・童話などの本を読む	74.6	66.7 <<	83.2
読みたい本を本屋さんで探して買う	71.1	68.2 <	74.3
家でペットや動物・植物の世話をする	59.4	55.7 <	63.4
自然や動物・植物の本を読む	53.5	60.1 >>	46.4
地域の図書館で本を読んだり借りたりする	53.4	49.0 <	58.3
歴史の本や伝記の本を読む	51.0	52.9	49.3
新聞のニュース欄を読む	45.5	47.1	44.3
美術館や博物館に行く	28.3	28.4	28.3
日記をつける	24.0	16.2 <<	32.2

注1) 数値は「よくする」と「時々する」の合計。
 注2) <>は10ポイント以上、<>は5ポイント以上差があるもの。
 注3) ()内はサンプル数。

図2-1-11 日常生活の中での「学習」(時系列)



注1) 数値は「よくする」と「時々する」の合計。
 注2) ※は第2回に該当項目なし。
 注3) サンプル数は第1回2,578名、第2回2,665名、第3回2,402名、第4回2,726名。

④ 家庭環境

「親に博物館や美術館に連れていってもらったことがある」(第1回65.9%→第4回54.9%)をはじめ、親とのかかわりが全体的に減少している。また性別にみると、勉強に対するプレッシャーや学歴期待は男子のほうが強く感じている。

Q | あなたの家のことについてお聞きます。

この項の最後に、さまざまなかたちで「家での学習の様子」に影響をもたらす、家庭環境についてみておこう。

表2-1-10は質問した13項目のうち、親とのかかわりを示す7項目を示したものである。これを見ると、「親とよく話をする」(86.0%)、「お母さんは私の成績をよく知っている」(75.8%)、「この1か月の間に、親に勉強をみてもらったことがある」(60.9%)の順に多く、いずれも6割以上の小学生が「あてはまる」と回答している。また、「お母さんは私の成績をよく知っている」が75.8%なのにに対して、「お父さんは私の成績をよく知っている」は53.1%と22.7ポイント低く、父母間で成績認知の程度に差がある様子がうかがえる。

時系列でみると、第1回から第4回の16年間で「あてはまる」とした比率が減少している項目が目立つ。「親に博物館や美術館に連れていってもらったことがある」(第1回65.9%→第4回54.9%、以下同)、「お母さんは私の成績をよく知っている」(85.8%→75.8%)、「ほとんど毎日、親は私に『勉強しなさい』と言う」(44.8%→35.7%)、「お父さんは私の成績をよく知っている」(58.5%→53.1%)と、第1回からたずねている項目ではすべてにお

いて、5ポイント以上減少している。第3回の調査時にも、子どもの勉強に対し親が管理しなくなっている点が指摘されたが、その傾向は今回も変わっていない。

性別にみると、「お母さんは私の成績をよく知っている」(女子80.5%>男子71.4%、以下同)、「親とよく話をする」(89.8%>82.5%)、「この1か月の間に、親に勉強をみてもらったことがある」(64.0%>58.0%)の3項目では、女子のほうが6~9ポイント程度高くなっている。反対に「ほとんど毎日、親は私に『勉強しなさい』と言う」(男子39.2%>女子31.9%、以下同)、「親は私にいい大学に行くことを期待している」(31.1%>24.2%)では、男子のほうが約7ポイント高い。話をしたり勉強を教わったりする親とのかかわりは女子のほうが多く、勉強に対するプレッシャーや学歴期待は男子のほうが強く感じている。

また、今回から携帯電話とパソコンの所有を新たにたずねている(表2-1-11)。「自分専用の携帯電話を持っている」は20.8%、「自分専用のパソコンを持っている」は11.0%であった。携帯電話の所有率は性差・地域差が大きく、女子や大都市の小学生ほど高くなっていた(女子25.3%>男子16.6%、大都市34.6%>地方都市15.5%>郡部8.5%)。

表2-1-10 親とのかかわりについて(時系列・性別)

	第1回 (2,578)	第2回 (2,665)	第3回 (2,263)	第4回 (2,726)	第4回	
					男子 (1,397)	女子 (1,310)
					(%)	
親とよく話をする	—	—	84.3	86.0	82.5	< 89.8
お母さんは私の成績をよく知っている	85.8	77.9	77.4	75.8	71.4	< 80.5
この1か月の間に、親に勉強をみてもらったことがある	—	—	61.9	60.9	58.0	< 64.0
親に博物館や美術館に連れていってもらったことがある	65.9	59.2	55.3	54.9	54.2	56.0
お父さんは私の成績をよく知っている	58.5	54.4	54.2	53.1	52.0	54.4
ほとんど毎日、親は私に「勉強しなさい」と言う	44.8	44.2	40.4	35.7	39.2	> 31.9
親は私にいい大学に行くことを期待している	—	—	—	27.8	31.1	> 24.2

注1) 複数回答。
 注2) 性別で<>は5ポイント以上差があるもの。
 注3) —は該当項目なし。
 注4) 第3回は、全員が全選択肢を無回答とした学校を除いて集計している。
 注5) ()内はサンプル数。

表2-1-11 携帯電話・パソコンの所有率(全体・性別・地域別)

	全体 (2,726)	男子 (1,397)	女子 (1,310)	大都市 (1,105)	地方都市 (684)	郡部 (937)
自分専用の携帯電話を持っている	20.8	16.6	< 25.3	34.6	15.5	8.5
自分専用のパソコンを持っている	11.0	12.6	9.4	12.8	9.4	10.1

注1) 複数回答。
 注2) 性別で<>は5ポイント以上差があるもの。
 注3) ()内はサンプル数。

3. 学校外の学習機会

① 学習塾の利用

通塾している小学生は36.5%と4割弱に達し、第3回からの5年間で「進学塾」の割合が急増した。大都市では「補習塾」の14.1%に対して、「進学塾」が30.5%と2倍になっている。「進学塾」での学習時間が1日に3時間を超す小学生が約7割もいる。

Q あなたは今、学習塾に行っていますか（そろばん、習字などの塾は除きます。自習教室は含めます）。
 【学習塾に行っている人にお聞きします】
 ●週に何日行っていますか。
 ●あなたの行っているのは、どんな学習塾ですか。
 ●学習塾では1回に、平均何時間くらい勉強しますか。

表2-1-12で、学習塾の通塾率をみてみよう。最初に第4回調査の結果からみると、さまざまな学習塾へ通塾している小学生は36.5%と、4割弱に達することがわかる。通っている学習塾のタイプは、「補習塾」が15.2%、「進学塾」が14.3%とほぼ同じ値になっている。同じ表で「その他」が5.9%と多くなっているが、どのような学習塾であるのか自由記述で回答してもらったところ、英語の塾という回答が多くみられた。

さらに同じ表で、学習塾の通塾率の時系列での変化をみると、第3回から第4回にかけ

て「補習塾」が3.7ポイント減少した。これに対して「進学塾」が5.0ポイント増加し、通塾者合計も2.9ポイントの増加となっている。「補習塾」と「進学塾」に通う小学生の比率については、第1回から第3回までがおおよそ2対1であったのが、今回はほぼ1対1になっている。なお、「進学塾」への通塾は大都市で高い値となっており、地方都市の5.4%や郡部の1.6%に対して、大都市で30.5%となっている。塾業界の推計では、2006年春に、東京の児童の3割程度が中学受験や公立中高一貫校受験をしたといわれており、ほぼこれに見

表2-1-12 学習塾の通塾率（時系列・性別・地域別）

					第4回				
	第1回 (2,578)	第2回 (2,665)	第3回 (2,402)	第4回 (2,726)	性別		地域別		
					男子 (1,397)	女子 (1,310)	大都市 (1,105)	地方都市 (684)	郡部 (937)
通塾者の合計	33.9	33.0	33.6	36.5	37.9	34.9	51.6	30.8	22.7
補習塾	18.5	18.2	18.9	15.2	16.6	13.5	14.1	17.8	14.5
進学塾	11.2	8.5	9.3	14.3	14.0	14.5	30.5	5.4	1.6
その他	2.9	3.5	4.2	5.9	6.2	5.6	5.6	6.4	5.8

注1)「通塾者の合計」は、「学習塾に行っていますか」の項目に「行っている」と回答した小学生。
 注2)この表での「補習塾」「進学塾」「その他」の数値は全体を母数として算出したため、巻末基礎集計表(p.105)と異なっている。
 注3) ()内はサンプル数。

合った比率になっている。

さらに、時系列での変化をみると、第3回から第4回にかけて、表2-1-13にあるように、大都市において「補習塾」の減少と「進学塾」の増加が顕著であり、「補習塾」が5.0ポイント減少し、「進学塾」が9.8ポイント増加している。

次に、図2-1-12は、小学生が学校外で勉強するとき、学習塾も含めて、どのような学習機会(手段)を利用しているかを示している。この図をみると、第4回では「市販の問題集・参考書」が35.2%とトップ、つづいて「通信教育」が20.9%、第3位が「補習塾」15.2%、第4位が「進学塾」14.3%となっている。そして、第5位が「宅配の学習教材」の10.7%、最下位が「家庭教師」の3.6%となっている。

時系列での変化をみると、「市販の問題集・参考書」がやや増加、「補習塾」がやや減少、「宅配の学習教材」が大きく減り、「進学塾」が大きく増加の傾向にある。

次に、表2-1-14を用いて、近年、通塾者の通塾日数が増えている様子を見てみよう。この表の数値は学習塾に通っている小学生の中での比率であるが、まず、第4回の数値に着目すると、学習塾に通っている小学生のうち、週に「1日」が17.7%、「2日」が40.4%、合わせて58.1%が週に「1日」もしくは「2日」の通塾日数になっている。これに対して「3日以上」(「3日」～「7日(毎日)」の合計、

以下同)が39.1%となっている。およそ6対4の割合である。

しかし、第1回から第3回との比較では、「3日以上」は、第1回が42.7%でそのあとは第2回が32.1%、第3回が31.4%と3割強まで下がっていたのが、今回急激に増加に転じていることがわかる。なお、同じ表で地域別にみると、「進学塾」の割合が高い大都市で「3日以上」が58.8%とおおよそ6割になっている。

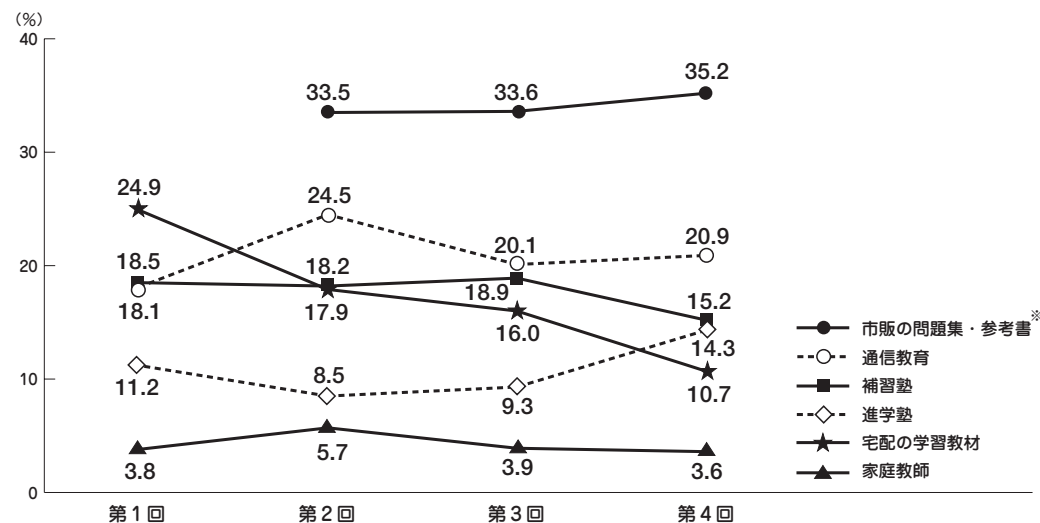
最後に、表2-1-15は、学習塾のタイプ別に学習塾での学習時間をみたものである。「補習塾」では「1時間くらい」がもっとも多く44.0%、つづいて「2時間くらい」が38.6%、これに「30分くらい」の5.3%を加えると、87.9%が「2時間まで」となっている。これに対して「進学塾」は、「3時間くらい」が44.2%、「4時間以上」が25.2%、合計して69.4%が「3時間以上」と答えている。「進学塾」での学習時間は非常に長いといえよう。3時間の授業を行っている学習塾の場合、一般に夕方5時15分に授業がスタートし、夜8時30分に授業が終了する。しかし、授業延長がたびたびあり、そんなときには授業終了は9時になる。また、4時間の授業を行う学習塾だと、延長なしでも授業終了は9時を過ぎることになる。駅やコンビニで9時過ぎ、10時過ぎに見かける子どもはこうした学習塾で勉強している可能性がある。

表2-1-13 大都市の学習塾タイプ別通塾率の変化（時系列）

	第4回		
	補習塾	進学塾	その他
第1回 (868)	18.5	29.3	2.1
第2回 (769)	16.0	25.6	1.6
第3回 (849)	19.1	20.7	4.2
第4回 (1,105)	14.1	30.5	5.6

注1)数値は全体を母数として算出したため、巻末基礎集計表(p.105)と異なっている。
 注2) ()内はサンプル数。

図2-1-12 学校外の学習機会(時系列)



注1) 調査項目は一部略記している。詳細は「調査票見本」(p.90 [3]14) ~ 17)、p.92 [5]SQ2) を参照のこと。
 注2) 「補習塾」「進学塾」の数値は全体を母数として算出したため、巻末基礎集計表 (p.105) と異なっている。それ以外の項目は、「あてはまる」と回答した比率。
 注3) ※は第1回に該当項目なし。
 注4) サンプル数は第1回2,578名、第2回2,665名、第3回2,402名、第4回2,726名。

表2-1-14 学習塾への週あたりの通塾日数(時系列・性別・地域別)

	時系列				地域別				
	第1回 (875)	第2回 (880)	第3回 (807)	第4回 (994)	男子 (529)	女子 (457)	大都市 (570)	地方都市 (211)	郡部 (213)
1日	12.3	12.4	15.5	17.7	18.9	16.2	10.0	21.3	34.7
2日	41.0	51.7	50.7	40.4	40.8	39.8	29.3	63.0	47.9
3日	21.1	15.6	20.1	23.2	21.0	25.8	34.2	10.0	7.0
4日	11.8	9.3	7.2	11.2	10.6	12.0	18.2	1.4	1.9
5日	6.6	5.0	2.7	3.5	4.2	2.8	5.4	1.4	0.5
6日	2.2	1.4	0.9	0.6	0.9	0.2	0.5	0.0	1.4
7日(毎日)	1.0	0.8	0.5	0.6	0.9	0.2	0.5	0.9	0.5
3~7日合計	42.7	32.1	31.4	39.1	37.6	41.0	58.8	13.7	11.3
無回答・不明	3.9	3.9	2.5	2.7	2.6	2.8	1.8	1.9	6.1

注1) サンプルは「学習塾に行っていますか」の項目に「行っている」と回答した小学生。
 注2) () 内はサンプル数。

表2-1-15 学習塾での学習時間(学習塾のタイプ別)

学習塾のタイプ	学習時間 (%)						
	30分 くらい	1時間 くらい	2時間 くらい	3時間 くらい	4時間 以上	3時間以上 合計	無回答・ 不明
補習塾 (414)	5.3	44.0	38.6	8.7	1.2	9.9	2.2
進学塾 (389)	0.8	8.0	20.8	44.2	25.2	69.4	1.0
その他 (160)	8.8	49.4	31.9	6.3	1.3	7.6	2.5
全体 (994)	3.9	30.1	29.7	22.1	10.9	33.0	3.3

注1) 「3時間以上」は「3時間くらい」と「4時間以上」の合計。
 注2) () 内はサンプル数。

② 習い事・おけいこ事

習い事・おけいこ事のベスト・スリーは、「スポーツ」51.3%、「音楽」22.7%、「習字」16.2%であった。時系列での変化では、「そろばん」「習字」といった日本固有の伝統的な習い事の減少傾向に歯止めがかからない。また「スポーツ」は、第2回の41.5%と比べて10ポイント近くの大きな増加となっている。

Q | あなたは、おけいこや学校外のクラブに行っていますか。

図2-1-13をみると、習い事・おけいこ事のベスト・スリーは、「スポーツ(水泳、剣道、柔道、体操、野球、サッカーなど)」51.3%、「音楽(ピアノ、バイオリンなど)」22.7%、「習字」16.2%であった。第4位以下は「英語」15.3%、「そろばん」7.0%、「バレエ、ダンス」6.1%、「その他」5.8%、「絵」1.6%となっており、「スポーツ」が群を抜いて多い。

同じ図で時系列での変化についてみてみよう。まず、第一に「そろばん」「習字」といった日本の伝統的な習い事の減少傾向に歯止めがかからない。第二に「スポーツ」は、第2回の41.5%と比べて10ポイント近くの大きな増加があり、第4回では51.3%となっている。子どもの世界でもロハス「健康や持続可能性を重視するライフスタイル(Lifestyles Of Health And Sustainability)」の志向があるのだろうか。スポーツ塾の増加や大人の健康志向の高まり、日本人アスリートの活躍などの影響も考えられる。第三に「その他」が今回は急減し、習い事・おけいこ事の多様性が失われていく様子がみてとれる。

つづいて、性別および地域別に習い事・お

けいこ事の利用状況をみてみよう(表2-1-16)。

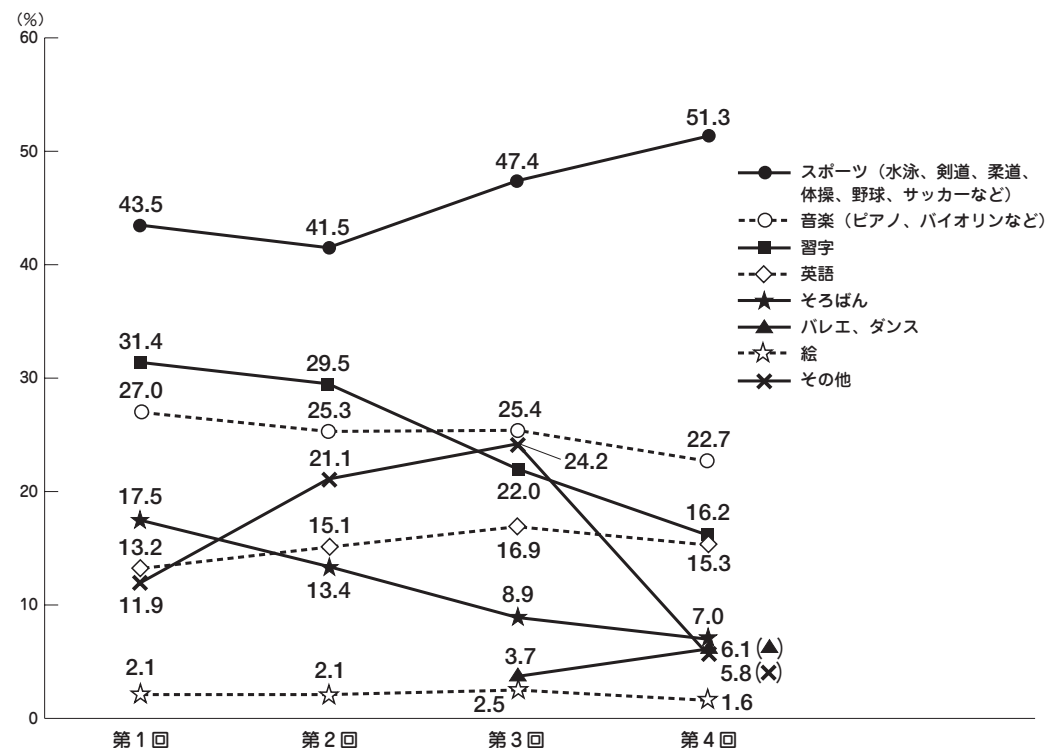
まず性別比較の結果からみると、学校教育では、男女平等が強求められているにもかかわらず、習い事・おけいこ事の世界では性差が非常に大きいことに気づく。男子のほうが多い習い事・おけいこ事は「スポーツ」であり、男子の65.4%に対して女子では36.3%と30ポイント近い大差になっている。

これに対して女子のほうが多い習い事・おけいこ事は、「音楽」(女子36.7%>男子9.7%、以下同)、「習字」(21.0%>11.5%)、「バレエ、ダンス」(11.3%>1.1%)などの芸術関係の習い事・おけいこ事であり、こちらもみな大きな差になっている。

最後に、習い事・おけいこ事の地域傾向をみてみよう。興味深いのは「スポーツ」で、郡部が46.2%ともっとも少ないのだが、もっとも多いのは大都市ではなく、地方都市の57.3%である。

「音楽」「英語」「バレエ、ダンス」は、都市規模が大きいほど利用率が高い。これらは、いわば「都市型」の習い事・おけいこ事であるといえよう。

図2-1-13 習い事・おけいご事(時系列)



注1) 複数回答。
 注2) 「バレエ、ダンス」は第1回・第2回に該当項目なし。
 注3) 「何もしていない」は省略した。
 注4) サンプル数は第1回2,578名、第2回2,665名、第3回2,402名、第4回2,726名。

表2-1-16 習い事・おけいご事(性別・地域別)

			(%)		
	男子 (1,397)	女子 (1,310)	大都市 (1,105)	地方都市 (684)	郡部 (937)
スポーツ(水泳、剣道、柔道、体操、野球、サッカーなど)	65.4	36.3	51.9	57.3	46.2
音楽(ピアノ、バイオリンなど)	9.7	36.7	26.9	22.5	17.9
習字	11.5	21.0	9.5	28.1	15.4
英語	14.4	16.6	18.1	14.6	12.6
そろばん	6.2	8.0	6.2	6.9	8.1
バレエ、ダンス	1.1	11.3	9.4	5.3	2.7
絵	1.1	2.1	2.5	1.6	0.4
その他	4.5	7.1	6.3	6.1	4.8

注1) 複数回答。
 注2) 「何もしていない」は省略した。
 注3) ()内はサンプル数。

4. メディアの利用

「家でパソコンを使う」のは約7割、「学校でパソコンを使う」のは約9割であり、第2回と比較して2倍以上増えた。インターネットを使う機会も、第3回と比較して大きく増加している。

Q | パソコンやテレビなどのメディア(機械)についてお聞きします。

総務省が行っている『通信利用動向調査(平成17年)』によると、パソコンの保有率(世帯)は、平成9年までは2割台であるが、平成12年に5割に達し、平成17年には8割を超えている。いまや多くの家庭にパソコンがあり、子どもたちもそれに接する機会が増えていることが容易に推察できる。また、文部科学省が行っている『学校における情報教育の実態等に関する調査』によると、「教育用コンピュータ1台あたりの児童数」は、平成12年には19.2人であったが、その5年後の平成17年には9.6人となっている。学校でも、子どもが使えるパソコンの台数が著しく増えている状況がうかがえる。このように、ここ数年で子どもを取り巻くメディア環境は大きく変わったが、それでは、小学生は実際にどのくらいパソコンに触れているのだろうか。また、それをどの程度学習に利用しているのだろうか。

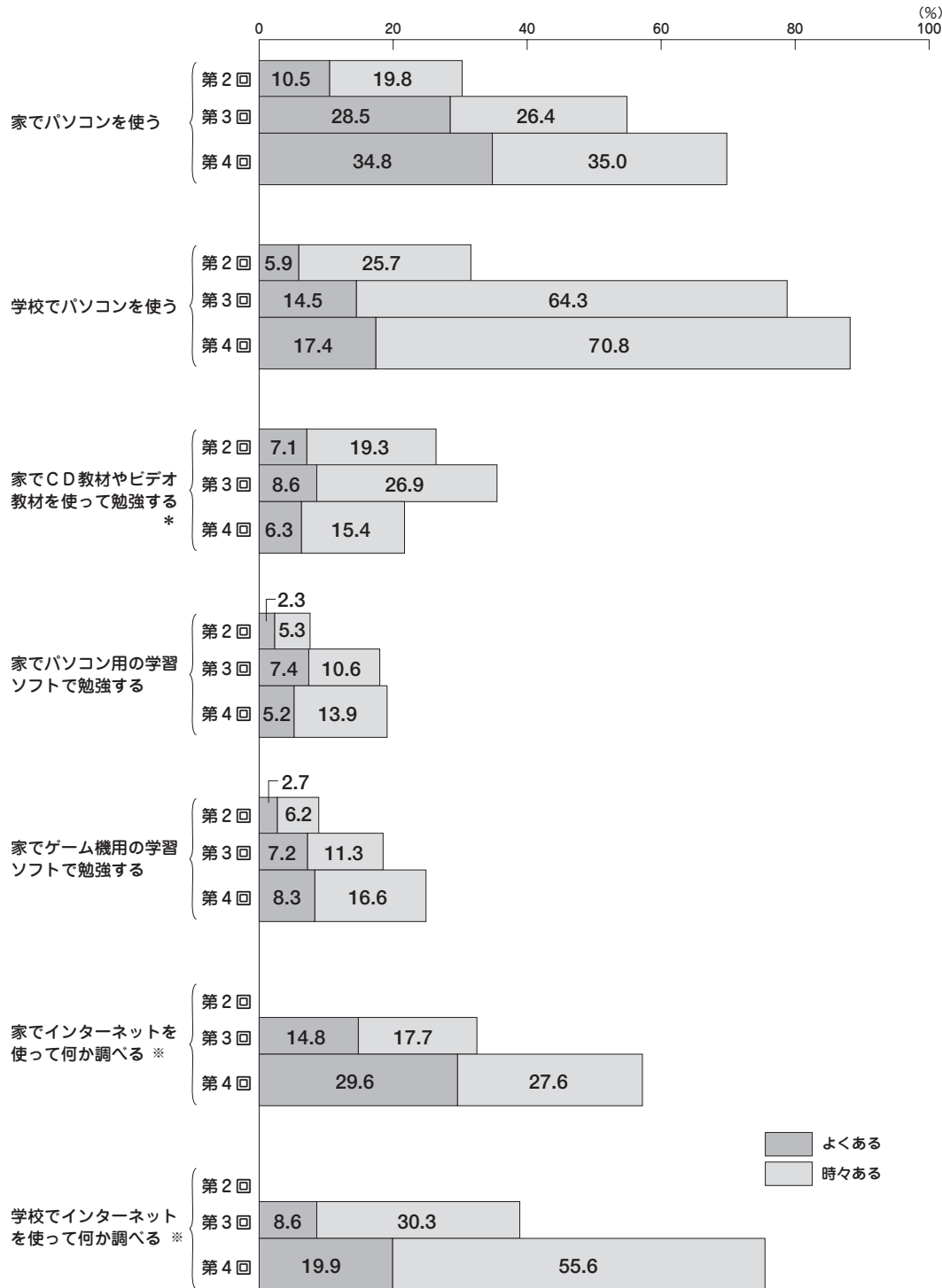
本調査では、メディアの利用について7項目にわたってたずねた(図2-1-14)。「家でパソコンを使う」に「ある」「よくある」+「時々ある」の%、以下同)と回答した比率をみると、第2回では30.3%であったが、第4回では69.8%となっており、10年間で2倍以上増えていることがわかる。さらに、家庭での利用頻度が高いことも特徴であり、およ

そ3人に1人が「よくある」と回答している。他方、「学校でパソコンを使う」は、第2回では31.6%であったが、第3回の時点で78.8%と大きく増え、第4回では88.2%と9割近くに達している。いまや、ほとんどの学校でパソコンが使われていることがわかる。ただし、学校での利用は「時々ある」の比率が高く、家庭での利用に比べて頻度が低い様子が見える。

「家でCD教材やビデオ教材を使って勉強する」は、第3回では35.5%であったが、第4回では21.7%にまで落ち込んだ。CDやビデオなどを教材として利用する場面は、第3回からの5年間で減少している。これに対して、「家でパソコン用の学習ソフトで勉強する」「家でゲーム機用の学習ソフトで勉強する」は増加傾向にある。学習に利用する媒体も、少しずつ変化しているようだ。

「家でインターネットを使って何か調べる」「学校でインターネットを使って何か調べる」の2項目については、第2回ではたずねていないが、第3回と第4回を比較するといずれも第4回の比率が大きく伸びている。家庭での利用は57.2%、学校での利用は75.5%であり、調べものをするときにインターネットを使うことが小学生にも定着しつつある様子だ。

図2-1-14 メディアの利用(時系列)



注1) 第1回は該当項目なし。※は第2回に該当項目なし。
 注2) *は第2回は「カセットテープ教材やビデオ教材を使って勉強する」、第3回は「CD教材やビデオ教材を使って勉強する」。
 注3) サンプル数は第2回2,665名、第3回2,402名、第4回2,726名。

第2節

小学生の学習観・成績観・社会観

1. 成績観

① 成績の自己評価

成績の自己評価は、「真ん中」とその前後にほぼ6割が集中。時系列的にみると、成績の自己評価は第1回から第4回にかけて、真ん中より上と回答する比率が高まっている。

Q | ●あなたの今の成績は、クラスの中でどのくらいですか。
 ●次の教科(算数、国語)の今の成績は、クラスの中でどのくらいですか。

クラスの中で成績の自己評価について時系列での変化を図2-2-1に示した。選択肢は「1(上のほう)」から「4(真ん中)」を経て「7(下のほう)」まで7段階に分けて、いずれかの段階を成績の自己評価にもとづき選択させた。全体を「上位層」(「1」「2」「3」、以下同)、「中位層」(「4」)、「下位層」(「5」「6」「7」、以下同)に三分位すると、第1回から第4回にかけて、成績の自己評価は真ん中より上と回答する比率がわずかながらではあるが高まっている。第1回からの比率をみると、第1回での上位層が29.4%であったのに対して、第4回では33.8%と4ポイント程度増加している。同様に下位層についてみると、第1回の36.2%に対し、第4回では33.9%とわずかながら減少している。

あくまでも自己申告ではあるものの、自己の成績を相対的に上位に位置づける小学生が増加していることがわかる。また性別による違いを図2-2-2に示した。上位層をみると、男子は36.6%、女子は31.0%であり、中位層は男子で26.5%、女子で32.4%である。このことから、男子のほうがやや上方に自己の成績を位置づけ、女子は中間くらいに位置づける傾向があることがうかがえる。さらに教科別での成績の自己評価を図2-2-3に示した。「国語」は中位層に27.5%が集中している。しかし、上位層に注目すると、「国語」が34.0%、「算数」が42.5%である。相対的に「国語」より「算数」を上位に位置づけているといえよう。